

## 書評

太田紘史編著

『モラル・サイコロジー—心と行動から探る倫理学』  
(春秋社、2016年)

鈴木 貴之

人間の心に関する科学的探究の進展はめざましい。心理学や認知科学に加えて、近年では、神経科学、進化生物学、行動経済学など、さまざまなアプローチによって、心のメカニズムの解明が進んでいる。道徳に関する心の働きも例外ではない。道徳的な問題について考えるときの脳の働き、道徳に関する文化差、道徳の進化などについて、過去数十年のあいだに、急速に研究が進んでいる。

では、これらのいわゆるモラル・サイコロジー研究によって、古来哲学者が取り組んできた倫理学の諸問題に解決がもたらされることはあるだろうか。一つの典型的な回答は、これらは事実に関する研究であるのに対して、倫理学の問題は価値や規範に関する問題であるため、前者によって後者を解決することはできない、というものである。しかし、モラル・サイコロジー研究のめざましい進展を目の当たりにすれば、そこに倫理学の諸問題を解決するための何らかの手がかりを期待することは自然だろう。

本書の目的は、このような状況をふまえ、近年のモラル・サイコロジー研究の成果を概観し、その倫理学的な意義について検討を行うことである。ところが、興味深いことに、その結論は多くの場合否定的なものである。たとえば第4章では、道徳的判断においては感情が重要な役割を果たすと考え感情主義のバリエーションを整理したうえで、感情主義と対置される理性主義がモラル・サイコロジー研究によってただちに退けられることはないと論じられる。また第5章では、道徳的問題に関する直観的判断は信頼できないという主張が批判的に検討され、その根拠とされる一連の経験的研究からは、そのような結論を導き出すことはできないと論じられる。

経験的なモラル・サイコロジー研究に大きな期待を寄せる者にとっては、本書のこのような慎重な姿勢は物足りないものに感じられるかもしれない。

しかし、哲学的に見れば、このような姿勢はきわめて健全なものである。事実的な問題と価値的な問題のあいだに何らかのギャップがあるのは否定しがたいことであり、このギャップを埋めようとする試みの妥当性を冷静に評価することこそ、モラル・サイコロジー研究において哲学者に求められる役割だからである。

とはいえ、本書のこのような慎重な姿勢は、事実に関する知見から価値に関する問題に何らかの教訓を引き出すことは本当に可能なのだろうか、という疑念を再燃させる。多くの章で論じられているように、そのような試みの多くが現状では失敗に終わっているのは、経験的なデータが不十分だからなのだろうか、概念的な整理が不十分だからなのだろうか、あるいは、このような試みはやはり根本的に誤っているのだろうか。（このような疑問が生じる場面を一つだけ具体的に挙げよう。第6章の結びで、信原は、内在主義と外在主義および構成的内在主義と非構成的内在主義の対立に経験的探究によって決着をつける可能性を示唆している。しかし、どの脳活動が道徳判断や動機を担うのかは、この論争と中立的に特定できるものではないかもしれない。）

この疑念は、モラル・サイコロジー研究と規範倫理学の関係においてとくに深刻なものとなる。メタ倫理学の問題の多くは本質的に事実的な問題であり、モラル・サイコロジーに関する経験的な知見との結びつきを比較的想定しやすい。これに対して、たとえば功利主義と義務論の対立に、経験的知見によってどのようにして解決がもたらされうるのかは明らかではない。

もっとも、われわれはここで事実と価値は別物だという立場に安易に立ち返るべきではないだろう。ここでわれわれに求められているのは、さらなる経験的知見の蓄積とさらなる哲学的分析によって、価値や規範に関して何が言えるのかを、粘り強く、具体的に明らかにしていくことである。本書は、その重要な第一歩だと言えるだろう。